

# 小さき者へ

有島武郎

お前たちが大きくなって、一人前の人間に育ち上った時、その時までお前たちのパパは生きていないか、それは分らない事だが、父の書き残したものを繰返して見る機会があるだろうと思う。その時この小さな書き物もお前たちの目の前に現われ出るだろう。時はどんどん移って行く。お前たちの父なる私がある時お前たちにどう映るか、それは想像も出来ない事だ。恐らく私が今ここで、過ぎ去ろうとする時代を噛み憐れんでいるように、お前たちも私の古臭い、心持を噛み憐れむのかも知れない。私はお前たちのためにそうあらんことを祈っている。お前たちは遠慮なく私を踏台にして、高い遠い所に私を乗り越えて進まなければ間違っているのだ。然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にいるか、或はいたかという事実は、永久にお前たちに必要なものだとは思うのだ。お前たちがこの書き物を読んで、私の思想の未熟で頑固なのを噛む間にも、私たちの愛はお前たちを暖め、慰め、励まし、人生の可能性をお前たちの心に味覚させずにおかないと私は思っている。だからこの書き物を私はお前たちにあてて書く。

心持…外部の  
ことに対して感  
じ、心の情態。

お前たちは去年一人の、たった一人のママを永久に失ってしまった。お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪われてしまったのだ。お前たちの人生はそこで既に暗い。「この間ある雑誌社が「私の母」という小さな感想を書け」として来た時、私は何んの気もなく、「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きていく事だ」と書いてのけた。そして私の万年筆がそれを書き終えるか終えないに、私はすぐお前たちの事を思った。私の心は悪事でも働いたように痛かった。しかも事実は事実だ。私はその時点で幸福だった。お前たちは不幸だ。回復の途なく不幸だ。不幸な者たちよ。

回復…(回復)…よくない状態におちこんでいたものが、もとの状態をとりもどすこと。  
陣痛…出産の際、くり返して起こるおなかの痛み。

暁方の三時からゆるい陣痛が起り出して不安が家中に拡がったのは今から思うと七年前の事だ。それは吹雪も吹雪、北海道ですら、滅多にはないひどい吹雪の日だった。市街を離れた川沿いの一つ家はけし飛ぶ程揺れ動いて、窓硝子に吹きつけられた粉雪は、さらぬだに綿雲に閉じられた陽の光を二重に遮って、夜の暗さがいつまでも部屋から退かなかつた。電燈の消えた薄暗い中で、白いものに包まれたお前たちの母上は、夢心地に呻き苦しんだ。私は一人の学生と一人の女中とに手伝われながら、火を起したり、湯を沸かしたり、使を走らせたりした。産婆が雪で真白になってころげこんで来た時は、家中のものが思わずぼっと氣息をついて安堵し

さらぬだに…そうであらなくてさよ。

産婆…「助産婦」の旧称。出産を助け、妊産婦や新生児の世話をする職業の女性。

だが、昼になっても昼過ぎになっても出産の様が見えないで、産婆や看護婦の顔に、私だけに見える気遣いの色が見え出すと、私は全く慌ててしまっていた。書斎に閉じ籠って結果を待っていられなくなった。私は産室に降りて行って、産婦の両手をしっかりと握る役目をした。陣痛が起る度に産婆は叱るように産婦を励まして、一分も早く産を終らせようとした。然し暫くの苦痛の後、産婦はすく又深い眠りに落ちてしまった。軒さえかいて安々と何事も忘れたように見えた。産婆も、後から駆けつけてくれた医者も、顔を見合わして吐息をつくばかりだった。医師は昏睡が来る度毎に何か非常の手段を用いようかと案じているらしかった。

昼過ぎになると戸外の吹雪は段々鎮まっていって、濃い雪雲から漏れる薄日の光が、窓にたまった雪に来てそつと戯れるまでになった。然し産室の中の人々にはますます重い不安の雲が蔽い被さった。医師は医師で、産婆は産婆で、私は私で、銘々の不安に捕われてしまった。その中で何等の危害をも感ぜぬらしく見えるのは、一番恐ろしい運命の淵に臨んでいる産婦と胎児だけだった。二つの生命は昏々として死の方へ眠って行った。

丁度三時と思わしい時に 産気がついてから十二時間目に 夕を催す光の中で、最後と思わしい激しい陣痛が起った。肉の眼で恐ろしい夢でも見るように、産婦

はかつと臉を開いて、あてもなく一所を睨みながら、苦しげというより、恐ろしげに顔をゆがめた。そして私の上体を自分の胸の上になくし込んで、背中を 羽がい抱きすくめた。若し私が産婦と同じ程度に いきんでいなければ、産婦の腕は私の胸を押しつぶさるうと思つ程だった。そこにいる人々の心は思はず総立ちになった。医師と産婆は場所を離れたように大きな声で産婦を励ました。

ふと産婦の握力がゆるんだのを感じて私は顔を挙げて見た。産婆の膝許には血の気のない 嬰兒が仰向けに横たえられていた。産婆は膝でもつくようにその胸をはげしく敲きながら、葡萄酒葡萄酒といつていた。看護婦がそれを持って来た。産婆は顔と言葉とでその酒を盥の中にあけると命じた。激しい 芳芬と同時に盥の湯は血のような色に変わった。嬰兒はその中に浸された。暫くしてかすかな産声が氣息もつけない緊張の沈黙を破って細く響いた。

大きな天と地との間に一人の母と一人の子とがその 刹那に 忽如として現われ出たのだ。

その時新たな母は私を見て弱々しくほぼえんだ。私はそれを見ると何んという事なしに涙が眼がしらに滲み出て来た。それを私はお前たちに何んといつていい現わすべきかを知らない。私の生命全体が涙を私の眼から搾り出したとでもいえばいい

昏睡…意識を失って、目さめない病的な状態。

羽がい…相手の背後から両手をわきの下に通し、手を組み合わせて強くしめあけること。  
いきむ…息をつめて腹に力を入れる。

嬰兒…赤んぼう。

芳芬…よいかおり。

刹那…ほんのみじかい瞬間。

忽如…たちまちおこるさま。忽然。突如。

のか知らん。その時から生活の諸相が総て眼の前で変わってしまった。お前たちの中最初にこの世の光を見たものは、このようにして世の光を見た。二番目も三番目も、生れよに難易の差こそあれ、父と母とに与えた不思議な印象に変わりはない。

こうして若い夫婦はつきつきにお前たち三人の親となった。

私はその頃心の中に色々な問題をあり余る程持っていた。そして始終醒醒しながら何一つ自分を「満足」に近づけるような仕事をしていなかった。何事も独りで噛みしめてみる私の性質として、表面には十人並みな生活を生活していながら、私の心は「やちと」もすると突き上げて来る不安にいらさらされた。ある時は結婚を悔いた。ある時はお前たちの誕生を悪んだ。何故自分の生活の旗色をもっと鮮明にしない中に結婚なぞをしたか。妻のある為めに後ろに引きずって行かれねばならぬ重みの幾つかを、何故好んで腰につけたのか。何故二人の肉慾の結果を天からの賜物のように思わねばならぬのか。家庭の建立に費す労力と精力とを自分は他に用うべきではなかったのか。

私は自分の心の乱れからお前たちの母上を屢々泣かせたり淋しがらせたりした。またお前たちを没義道に取りあつかった。お前達が少し執念く泣いたりいがんだりする声を聞くと、私は何か残酷な事をしないではいられなかった。原稿紙にでも向っていた時に、お前たちの母上が、小さな家事上の相談を持って来たり、お前たちが泣き騒いだりしたりすると、私は思わず机をたたいて立上ったりした。そして後ではたまらない淋しさに襲われるのを知りぬいていながら、激しい言葉を遣ったり、厳しい折檻をお前たちに加えたりした。

然し運命が私の我儘と無理解とを罰する時が来た。どうしてもお前たちを子守に任せておけないで、毎晩お前たち三人を自分の枕許や、左右に臥らして、夜通し一人を寝かしつけたり、一人に牛乳を温めてあてがったり、一人に小用をさせたりして、碌々熟睡する暇もなく愛の限りを尽したお前たちの母上が、四十一度という恐ろしい熱を出してどっと床に倒れた時の驚きもさる事ではあるが、診察に来てくれた二人の医師が口を揃えて、結核の徴候があるといった時には、私は唯訳もなく青くなってしまう。検査の結果は医師たちの鑑定を裏書きしてしまった。そして四つと三つと二つとなるお前たちを残して、十月末の淋しい秋の日に、母上は入院せねばならぬ体となってしまう。

私は日中の仕事を終ると飛んで家に帰った。そしてお前たちの一人か二人を連れて病院に急いだ。私とその町に住まい始めた頃働いていた克明な門徒の婆さん

諸相…表に現れるさまさまな姿やありさま。

醒醒…(物事を)気ぜわしくおこなう。

十人並み…容姿・能力などがふつうで、特に劣ってもすぐれてもないこと。

やちとすると…物事が、とかくそのような状態になつてしまいがちな様子。

旗色を鮮明にする…表立って表明する態度を明らかにする。

没義道…非道なこと。不人情なこと。

執念く…執念深くしつこく。いがむ…争つてどなりたてる。

折檻…こらしめるために、からだに苦痛を与えること。おしおき。

小用…小便をすること。

碌々…ない…まともでない。

検査…病を調査して、菌の有無を調べること。

克明な…実直な。こまかく丹念な。

門徒…浄土真宗の信者。

が病室の世話をしていた。その婆さんはお前たちの姿を見ると隠し隠し涙を拭いた。お前たちは母上を寝台の上に見つけると飛んでいってかじり付こうとした。結核症であるのをまだあかさされていないお前たちの母上は、宝を抱きかかえるようにお前たちをその胸に集めようとした。私はいい加減にあしらってお前たちを寝台に近づけないようにしなければならなかった。忠義をしようとしながら、周囲の人から極端な誤解を受けて、それを弁解してならない事情に置かれた人の味いそうな心持を幾度も味った。それでも私はもう怒る勇氣はなかった。引きはなすようにしてお前たちを母上から遠ざけて帰路につく時には、大抵街燈の光が淡く道路を照らしていた。玄關を這入ると雇人だけが留守していた。彼等は二三人もいる癖に、残しておいた赤坊のおしめを代えようとしなかった。気持ち悪げに泣き叫ぶ赤坊の股の下はよくくしょ濡れになっていた。

10

お前たちは不思議に他人になつかない子供たちだった。ようようお前たちを寝かしつけてから私はそつと書齋に這入って調べ物をした。体は疲れて頭は興奮していた。仕事をすまして寝付こうとする十一時前後になると、神経の過敏になったお前たちは、夢などを見ておびえながら眼をさますのだった。暁方になるとお前たちの一人は乳を求めて泣き出した。それに起こされると私の眼はもう朝まで閉じなかつた。朝飯を食つと私は赤い眼をしながら、堅い心のようなものの出来た頭を抱えて仕事をする所に出懸けた。

15

北国には冬が見る見る通つて来た。ある時病院を訪れると、お前たちの母上は寝台の上に起きかえつて窓の外を眺めていたが、私の顔を見ると、早く退院がしたいといい出した。窓の外の楓があんなになったのを見ると心細いというのだ。なるほど入院したてには燃えるように枝を飾っていたその葉が一枚も残らず散りつくして、花壇の菊も霜に傷められて、萎れる時でもないのに萎れていた。私はこの淋しさを毎日見せておくだけでもいけないと思つた。然し母上の本当の心持はそんな所にはなくつて、お前たちから一刻も離れてはいられなくなつていたので。

10

今日はいよいよ退院するといつ日は、霧の降る、寒い風のびゅびゅびゅと吹く悪日だったから、私は思い止らせようとして、仕事をすますとすぐ病院に行つてみた。然し病室はからっぽで、例の婆さんが、貰つたものやら、座蒲団やら、茶器やらを部屋の隅でこそと始末していた。急いで家に帰つてみると、お前たちはもう母上のまわりに集まつて嬉しそうに騒いでいた。私はそれを見ると涙がこぼれた。知らない間に私たちは離れられないものになつてしまつていたのだ。五人の親子はどんどん押寄せて来る寒さの前に、小さく固まつて身を護ろうとする雑草の株の

15

ようよう……せつと  
かろつじつ。

起きかえる……起き上  
がる。起きなおる。

ように、互により添って暖みを分ち合おうとしていたのだ。然し北国の寒さは私たち五人の暖みでは間に合わない程寒かった。私は一人の病人と 頑是ないお前たちとを勞わりながら 旅雁のように南を指して遁れなければならなくなった。

それは初雪のどんどん降りしきる夜の事だった、お前たち三人を生んで育ててくれた土地を後にして旅に上ったのは。忘れる事の出来ないいくつかの顔は、暗い停車場のプラットフォームから私たちに 名残りを惜しんだ。陰鬱な津軽海峡の海の色も後ろになった。東京まで付いて来てくれた一人の学生は、お前たちの中の一小さい者を、母のよつに終夜抱き通していてくれた。そんな事を書けば限りがない。ともかく私たちは幸に怪我もなく、二日の 物憂い旅の後に晩秋の東京に着いた。

今までいた処とちがって、東京には沢山の親類や兄弟がいて、私たちのために深い同情を寄せてくれた。それは私にどれ程の力だったろう。お前たちの母上は程なく K 海岸にささやかな貸別荘を借りて住む事になり、私たちは近所の旅館に宿を取って、そこから見舞いに通った。一時は 病勢が非常に衰えたように見えた。お前たちと母上と私とは海岸の砂丘に行つて日向ぼっこをして楽しく二三時間を過ごす事になった。

どついつ積りで運命がそんな 小康を私たちに与えたのかそれは分らない。然し彼はどんな事があつても仕遂ぐべき事を仕遂げずにはおかなかつた。その年が暮れに迫つた頃お前たちの母上は 仮初の風邪からぐんぐん悪い方へ向いて行つた。そしてお前たちの中の一人も突然原因の解らない高熱に侵された。その病気の事を私は母上に知らせるのに忍びなかつた。病児は病児で私を暫くも手放そうとはしなかつた。お前たちの母上からは私の 無沙汰を責めて来た。私は遂に倒れた。病児と枕を並べて、今まで経験した事のない高熱の為に呻き苦しまねばならなかつた。私の仕事？ 私の仕事は私から千里も遠くに離れてしまった。それでも私はもう私を悔もつとはしなかつた。お前たちのために最後まで戦おうとする熱意が病熱よりも高く私の胸の中で燃えているのみだつた。

正月早々悲劇の絶頂が到来した。お前たちの母上は自分の病気の真相を明かされねばならぬ羽目になった。そのむずかしい役目を勤めてくれた医師が帰つて後のお前たちの母上の顔を見た私の記憶は一生涯私を駆り立てるだろう。真蒼な清々しい顔をして枕についたまま母上には冷たい覚悟を微笑に云わして静かに私を見た。そこには死に対する Resignation と共にお前たちに対する根強い執着がまぎれどと刻まれていた。それは物凄くさえあつた。私は 凄惨な感じに打たれて思わず眼を伏せてしまった。

頑是ない…幼くてまだ是非・善悪のわかまえない。ききわけがない。

旅雁…空を渡つていく雁。

名残り…別れていくものや、過ぎ去る者を惜しむ気持ち。

陰鬱…暗い感じである。

物憂い…なんとなくくつたりして、何もする気力がない。

病勢…病気がよくなつたり、悪くなつたりしていくようす・病状。

小康…病気などの危険な状態が、一時おさまること。

仮初…その場かぎりのこと。

無沙汰…長い間、会うことも手紙を出すこともなく、すぎること。

Resignation…あきらめ。

凄惨…目をそむけたくなるほどいたましいこと。むごたらしいこと。

愈々H海岸の病院に入院する日が来た。お前たちの母上は全快しない限りは死ぬともお前たちに逢わない覚悟の臍を堅めていた。二度とは着ないと思われる。そして実際着なかつた。晴着を着て座を立つた母上は、内外の母親の眼の前でさめざめと泣き崩れた。女ながらに気性の勝れて強いお前たちの母上は、私と二人だけいる場合でも泣顔などは見せた事がないといつてもいい位だったのに、その時の涙は拭くあとからあとから流れ落ちた。その熱い涙はお前たちだけの尊い所有物だ。それは今は乾いてしまった。大空をわたる雲の一片となっているか、谷河の水の一滴となっているか、大洋の泡の二つとなっているか、又は思いがけない人の涙堂に貯えられているか、それは知らない。然しその熱い涙はともかくもお前たちだけの尊い所有物なのだ。

自動車のいる所に来ると、お前たちの中熱病の予後にある一人は、足の立たない為めに下女に背負われて、一人はよちよちと歩いて、一番末の子は母上を苦しめ過ぎるだろうという祖母たち的心遣いから連れて来られなかつた。母上を見送りに出て来ていた。お前たちの頑是ない驚きの眼は、大きな自動車にばかり向けられていた。お前たちの母上は淋しくそれを見やっていた。自動車が動き出すとお前たちは女中に勧められて兵隊のように、拳手の礼をした。母上は笑って軽く

頭を下げていた。お前たちは母上がその瞬間から永久にお前たちを離れてしまうと、は思わなかつたろう。不幸な者たちよ。

それからお前たちの母上が最後の氣息を引きとるまでの一年と七箇月の間、私たちの間には烈しい戦が闘われた。母上は死に対して最上の態度を取る為めに、お前たちに最大の愛を遺すために、私を加減なしに理解する為めに、私は母上を病魔から救う為めに、自分に迫る運命を勇らしく肩に担い上げる為めに、お前たちは不思議な運命から自分を解放する為めに、身にふさわない境遇の中に自分をはめ込む為めに、闘った。血まぶれになって闘ったといつていい。私も母上もお前たちも幾度弾丸を受け、刀剣を受け、倒れ、起き上り、又倒れたらう。

お前たちが六つと五つと四つになった年の八月の二日に死が殺到した。死が絶てを圧倒した。そして死が絶てを救った。

お前たちの母上の遺言書の中で一番崇高な部分はお前たちに与えられた一節だった。若しこの書き物を読む時があつたら、同時に母上の遺書も読んでみるがいい。母上は血の涙を泣きながら、死んでもお前たちに会わない決心を翻さなかつた。それは病菌をお前たちに伝えるのを恐れたばかりではない。又お前たちを見る事によつて自分の心の破れるのを恐れたばかりではない。お前たちの清い心に残酷な死

臍を堅める…決心をする。覚悟を決める。内外の母親…自分の母と夫の母のこと。

涙堂…涙液が眼から鼻へ流れる道。

予後…病気が治療したあとの経過。

拳手の礼…右手を、顔の右横へ上げた。り、ななめ上につき出してする敬礼。

血まぶれ…「血まみれ」に同じ。

崇高…とりわけすぐれていて。気高い。

の姿を見せて、お前たちの一生を いやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの伸び伸びて行かなければならぬ靈魂に少しでも大きな傷を残す事を恐れたのだ。幼児に死を知らせる事は無益であるばかりでなく有害だ。葬式の時はお前たちにつけて楽しく一日を過ごさして貰いたい。そうお前たちの母上は書いています。

「子を思う親の心は日の光世より世を照る大きさに似て」  
とも詠じている。

母上が亡くなった時、お前たちは丁度 信州の山の上においた。若しお前たちの母上の 臨終にあわせなかったら一生恨みに思つたろうとさえ書いてよこしてくれたお前たちの叔父上に強いて頼んで、お前たちを山から帰らせなかった私をお前たちが残酷だと思つ時があるかも知れない。今十一時半だ。この書き物を 草している部屋の隣りにお前たちは枕を列べて寝ているのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の齢になつたら私のした事を、即ち母上のさせよつとした事を高く見る時が来るだろう。

私はこの間にどんな道を通つて来たろう。お前たちの母上の死によって、私は自分の生きて行くべき 大道にさまよい出た。私は自分を愛護してその道を踏み迷わずに通つて行けばいいのを知るようになった。私は嘗て一つの創作の中に妻を犠牲

にする決心をした一人の男の事を書いた。事実にあつてお前たちの母上は私のために犠牲になつてくれた。私のように持ち合わせた力の使いようを知らなかった人間はない。私の周囲のものは私を一個の小心な、魯鈍な、仕事の出来ない、憐れむべき男と見る外を知らなかった。私の小心と魯鈍と無能力とを徹底さして見ようとしてくれるものはなかった。それをお前たちの母上は 成就してくれた。私は自分の弱さに力を感じ始めた。私は仕事の出来ない所に仕事を見出した。大胆になれない所に大胆を見出した。鋭敏でない所に鋭敏を見出した。言葉を換えていえば、私は鋭敏に自分の魯鈍を見貫き、大胆に自分の小心を認め、労役して自分の無能力を体験した。私はこの力を以て己れを鞭打ち他を生きる事が出来るように思つ。お前たちが私の過去を眺めてみるような事があつたら、私も無駄には生きなかつたのを知つて喜んでくれるだろう。

雨などが降りくらしして 惘鬱な気分が家の中に漲る日などに、どうかするとお前たちの一人が黙つて私の書齋に這入つて来る。そして一言パパといったきりで、私の膝によりかかつたまましくしくと泣き出してしまふ。ああ何がお前たちの頑はない眼に涙を要求するのだ。不幸な者たちよ。お前たちが 謂れもない悲しみにくずれのを見るに堪して、この世を淋しく思わせるものはない。またお前たちが元気よ

いやが上に…なおその上に。あるが上にあります。

信州…信濃(しなの)の別名。今の長野県。  
臨終…人が息をひきとろつとするとき。  
草する…文案を作る。草稿を作る。

大道…人の踏み行くべき正しい道。道徳の根本。

魯鈍…愚かでにぶい。

成就…達成すること。

労役…骨の折れる力仕事。

惘鬱…「憂鬱」に同じ。

謂れもない…そのよつにいわれる理由もない。

く私に朝の挨拶をしてから、母上の写真の前に駆けて行って、「ママちゃん御機嫌よく」と快活に叫ぶ瞬間ほど、私の心の底までぐざと刮り通す瞬間はない。私はその時、ぎよつとして無劫の世界を眼前に見る。

世の中の人は私の 述懐を馬鹿々々しいと思つに違いない。何故なら妻の死とはそこにもここにも倦きはてる程 夥しくある事柄の一つに過ぎないからだ。そんな事を重大視する程世の中の人は 閑散でない。それは確かにそうだ。然しそれにもかかわらず、私といわず、お前たちも行く行くは母上の死を何物にも代えがたく悲しく口惜しいものに思ふ時が来るのだ。世の中の人が無頓着だといってそれを恥じてはならない。それは恥すべきことじゃない。私たちはそのありがちの事柄の中からも人生の淋しさに深くぶつかってみることが出来る。小さなことが小さなことではない。大きなことが大きなことでない。それは心一つだ。

何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生えだ。泣くにつけ、笑うにつけ、面白がるにつけ淋しがるにつけ、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷つく。

然しこの悲しみがお前たちと私とにどれ程の強みであるかをお前たちはまだ知らない。私たちはこの損失のお蔭で生活に一段と深入りしたのだ。私共の根はいくらかでも大地に延びたのだ。人生を生きる以上人生に深入りしないものは災いである。

同時に私たちは自分の悲しみにはかり浸っていてはならない。お前たちの母上は亡くなるまで、金銭の 累いからは自由だった。飲みたい薬は何んでも飲む事が出来た。食いたい食物は何んでも食ふ事が出来た。私たちは偶然な社会組織の結果からこんな特権ならざる特権を 享樂した。お前たちの或るものは幽かながらU氏一家の模様を覚えてるだろう。死んだ 細君から結核を伝えられたU氏があの理智的な 性情を有ちながら、天理教を信じて、その御 祈祷で病気を癒そうとしたその心持を考えると、私はたまらなくなる。薬がきくものか祈祷がきくものかそれは知らない。然しU氏は医者薬が飲みたかつたのだ。然しそれが出来なかつたのだ。U氏は毎日下血しながら役所に通つた。ハンケチを巻き通した喉からは歎かれた声しか出なかつた。働けば病気が重なる事は知れきつていた。それを知りながらU氏は御祈祷を頼みにして、老母と二人の子供との生活を続けるために、勇ましく飽くまで働いた。そして病気が重つてから、なげなしの金を出して貰つた古賀液の注射は、田舎の医師の不注意から静脈を外れて、激烈な熱を引起した。そしてU氏は無資産の老母と幼児とを後に残してそのために 斃れてしまった。その人たちは私たちの隣りに住んでいたのだ。何んという運命の皮肉だ。お前たちは母上の死を思い出すと共に、U氏を思い出すことを忘れてはならない。そしてこの恐ろしい溝を埋め

述懐…自分の経験などに  
ついて、それに  
対する気持ちを述べ  
ること。また、述べ  
られた内容  
夥しく…とても多い  
こと。  
閑散…ひっそりと静  
まっているようす。

累い…心を悩ませる  
心配ごと。  
享樂…目の前の楽し  
みことを存分に味わ  
うこと。

細君…妻のこと。  
性情…生まれつきの  
心の持ちよう。氣質。  
気性。  
祈祷…神や仏に祈る  
こと。

なげなし…ものがと  
ても少ないこと。

斃れる…死ぬ。

る工夫をしなければならぬ。お前たちの母上の死はお前たちの愛をそこまで掘げさずに十分だと思っから私はいうのだ。

十分人せは淋しい。私たちは唯そういつて澄ましている事が出来るだろうか。お前たちと私とは、血を味った獣のように、愛を味った。行こう、そして出来るだけ私たちの周囲を淋しさから救うために働こう。私はお前たちを愛した。そして永遠に愛する。それはお前たちから親としての報酬を受けるためにいうのではない。お前たちを愛する事を教えてくれたお前たちに私の要求するものは、ただ私の感謝を受取つて貰いたいという事だけだ。お前たちが一人前に育ち上った時、私は死んでいるかも知れない。一生懸命に働いているかも知れない。老衰して物の役に立たないようになっているかも知れない。然し何れの場合にしろ、お前たちの助けなければならぬものは私ではない。お前たちの若々しい力は既に下り坂に向おうとする私などに煩わされてはならない。斃れた親を喰い尽して力を貯える獅子の子のように、力強く勇ましく私を振り捨てて人生に乗り出して行くがいい。

今時計は夜中を過ぎて一時十五分を指している。しんと静まった夜の沈黙の中にお前たちの平和な寝息だけが幽かにこの部屋に聞こえて来る。私の眼の前にはお前たちの叔母が母上にとて贈られた薔薇の花が写真の前に置かれている。それにつけ

て思い出すのは私がああ写真を撮つてやった時だ。その時お前たちの中に一番年だけたものが母上の胎に宿っていた。母上は自分でも分らない不思議な望みと恐れとで始終心をなやましていた。その頃の母上は殊に美しかった。希臘の母の真似だといつて、部屋の中にいい肖像を飾っていた。その中には ミネルバの像や、ゲーテや、クロムウェルや、ナイティンゲール女史やの肖像があった。その少女じみた野心をその時の私は軽い皮肉の心で観ていたが、今から思つただだ笑い捨ててしまうことはどうしても出来ない。私がお前たちの母上の写真を撮つてやうといつたら、思ふ存分化粧をして一番の晴着を着て、私の二階の書齋に這入つて来た。私は寧ろ驚いてその姿を眺めた。母上は淋しく笑つて私にいった。産は女の出陣だ。いい子を生むか死ぬか、そのどつちかだ。だから死際の装いをしたのだ。その時も私は心なく笑つてしまった。然し、今はそれも笑つてはいられない。

深夜の沈黙は私を厳肅にする。私の前には机を隔ててお前たちの母上が坐つているようにさえ思う。その母上の愛は遺書にあるようにお前たちを護らずにはいないだろう。よく眠れ。不可思議な時といつものの作用にお前たちを打任してよく眠れ。そうして明日は昨日よりも大きく賢くなつて、寢床の中から跳り出して来い。私は私の役目をなし遂げる事に全力を尽すだろう。私の一生が如何に失敗であるといつても、

年だけた・年上の

ミネルバ：ローマ神話で、技術・職人の神。ギリシア神話のアテネと同一視された。

ゲーテ：ドイツの作家。

クロムウェル：イギリスの軍人・政治家。

又私が如何なる誘惑に打負けようとも、お前たちは私の足跡に不純な何物をも見出し得ないだけの事はする。きつとする。お前たちは私の斃れた所から新しく歩み出さねばならないのだ。然しどちらの方向にどう歩まねばならぬかは、かすかながらにもお前たちは私の足跡から探し出す事が出来るだろう。

小さき者よ。不幸なそして同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は遠い。そして暗い。然し恐れてはならぬ。恐れぬ者の前に道は開ける。

行け。勇んで。小さき者よ。